

第7部会

1. セッション I で討議された内容 / 2. セッション II で討議された内容

「コンピュータ教育」部会では、本年度のテーマを「いつでも、どこでも受けられる教育を」として、討議を重ねてきた。討議の中から浮かび上がってきたいくつかの問題点をもとに主題を決め、各セッションを進行した。

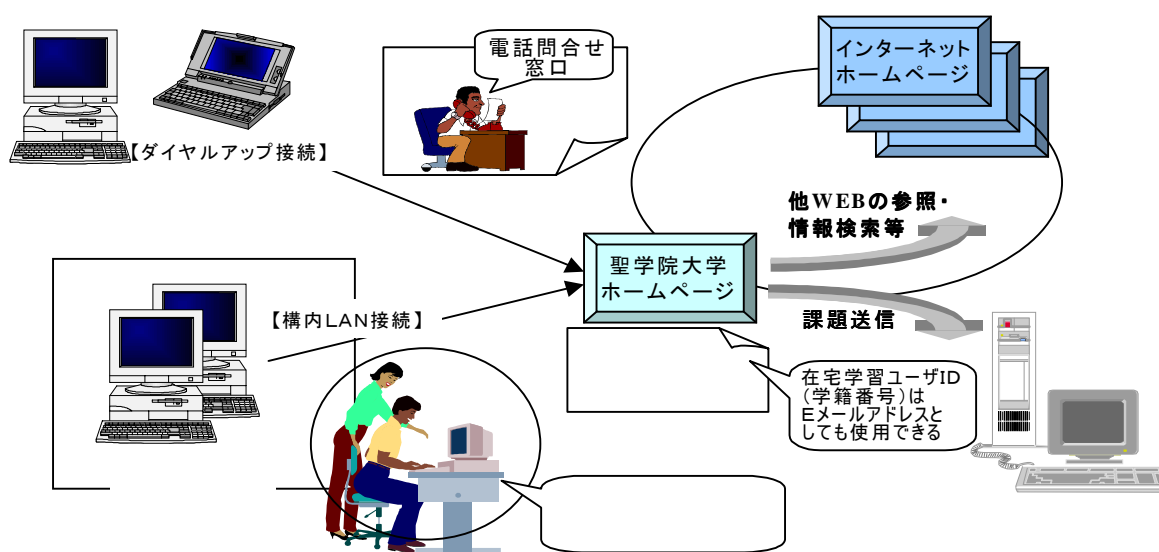
午前セッション(セッション )では、「ITの普及、向上と、教育との関連」という主題でデモを行ない、午後のセッション(セッション )では、「ITをベースとした教育を進めていくには」という主題で議論を行なった。

ITの普及、向上と、教育との関連

本部会は、コンピュータ技術の習得を目指した教育を考えるだけでなく、コンピュータという機械も含めた、IT(インフォメーションテクノロジー)を取り込んだ教育を考える、論議する部会である。しかし、ITの普及、向上と教育の関係が、はっきりと見えてこないという問題がある。

社会の動きを見てみると、数年前盛んに使われたIT革命という言葉はほとんど死語と化し、それに代わり、現在ではブロードバンド、あるいはADSLといった言葉が盛んに使われるようになってきている。これらの言葉の違いは、一昔前なら夢物語であったリアルタイムでの画像を含めた双方向通信が現実のものとなったということである。

しかし、こうした技術の向上、通信速度の向上を受けての教育現場におけるITの応用は、まだ始まったばかりである。通信衛星や専用高速回線を使い、講師とインタラクティブに質疑応答ができる講義や、一般ネットワークを使い、講義を流す試みが、大手予備校や大手の大学で行われている。ただ、こうした試みは、人的、コスト的な問題を抱え、一部の試みを除いて、ほとんどはまだまだ実験的な要素が強いといわざるを得ない。さらに、小学校や中学校、高校では、コンピュータやインターネットの使い方、あるいはコンピュータを使った授業が行われている程度に留まっている。



以上述べた現状認識に立ち、午前のセッションでは、聖学院大学独自の履修方式を構築している「コンピュータ基礎」の現状説明(図1参照)と、大学のコンピュータ、ネットワーク施設を使ったデモを行なった。

ITをベースとした教育を進めていくには

午後のセッションでは、聖学院小学校、聖学院中学校高等学校、女子聖学院中学校高等学校よりの「教育と施設の現状説明」、「ブロードバンド時代を迎えての教育について」の話を踏まえ、参加者全員による議論を行なった(資料1~3参照)。

各校のITをベースにした教育の現状については、次の通りである。

- ・ 聖学院小学校では、2000年度から5、6年生を対象に本格的な情報の授業を始めている。2年目の2001年は、インターネットを使用した授業が多くなり、また週に1時間のクラブ活動でも、コンピュータを使った活動が行われるようになってきたとのことである。
- ・ 聖学院中学校高等学校では、新校舎(1999年12月、完成)に新設されたコンピュータ室を使い、高「総合学習」(パソコン未経験者対象)、放課後パソコン教室(中1~高の希望者)、各教科での活用、クラブ活動での利用などを行なっている。
- ・ 女子聖学院中学校高等学校では、中学1年の自由研究時間でのPC基礎体験プログラムや、高校では数学、理科、そして美術といった教科でのPCの利用を進めているほか、中学(来年度)、高校(2004年度)へ導入される情報教育への取り組みを始めている。

部会参加者から指摘されたいくつかの重要な点は、次の通りである。

- ・ ITではなく、ITCとすべきであり、「C」はコミュニケーションであり、決して見逃してはならない。
- ・ コンピュータ教育は、ただ単にコンピュータ技術を教えるのではなく、問題発見、解決の能力を養うことにつながり、そうした視点からは小中高と大学の連携が重要となると考えられる。
- ・ 法人全体で、各校、大学図書館を統合するなど、データベース化を進めていくべき時期にきていると思われる。ただ、その際、小中高校、大学といった、いわゆる人間の発達段階にそった使い方などが考慮されるべきであろう。

### 3. 今後の課題、継続討議について

議論の結論としてまず一番にあげられるのは、ブロードバンド時代を迎えての教育を語るにあたり、大宮・上尾キャンパスと駒込キャンパスではギャップがあるということである。両キャンパスにおいてブロードバンド時代を迎えての教育を考えるためにも、また、コミュニケーションを盛んにする意味においても、LAN、そしてネットワークで結ばれた教職員一人コンピューター台の環境を作ることが大事である。また、小中高校、大学大学院といったこの組織でコンピュータ、LAN、ネットワークを考えるのではなく、スケールメリットを生かして、法人全体で戦略を持つべき時期にきているということである。来年度に向けては、今年度のテーマ「いつでも、どこでも受けられる教育を」を、さらに想像力豊かに考えていくこととした。

(報告者：大森 達也)

注)聖学院小学校、聖学院中学校高等学校、女子聖学院中学校高等学校よりのレポートは、部会長の責任より編集してあります。